

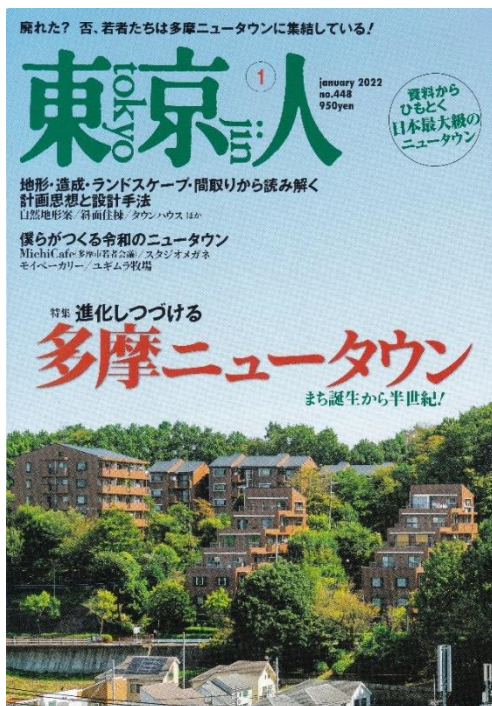
「歩行者空間77」と「多摩ニュータウン自然歩道計画」室井 隆良

1. UR ワンゲル同好会の活動再開

ふろんていあタウン工房のホームページのトップに載せ続けているように「ふろんていあタウン工房」設立のキッカケになったのは「日本のニュータウン開発に創成期から携わってきた日本住宅公団（現 UR 都市機構）のワンダーフォーゲル同好会の設立 40 周年記念事業として 2013 年 3 月に行ったマンマー・ビクトリア山登山です。

ワンゲル同好会は 1973 年 3 月多摩ニュータウンでの誕生、機関紙「渡り鳥通信」で活動案内・報告を行っています。2019 年の 12 月から 2 年間コロナ禍でワンゲル活動が休止状態でしたが、2021 年 12 月 11 日活動を再開して日帰りで多摩よこやまの道を歩きますという案内が送られてきました。私は残念ながら予定が重なって参加できなかったのですが、参加者 9 名のウォーキング報告号 12 月 14 日付の渡り鳥通信 1053 号が送られてきました。

若葉台駅から南大沢駅までの歩行距離約 12 km のコースで中間地点一本杉公園での昼食の写真も載っています。



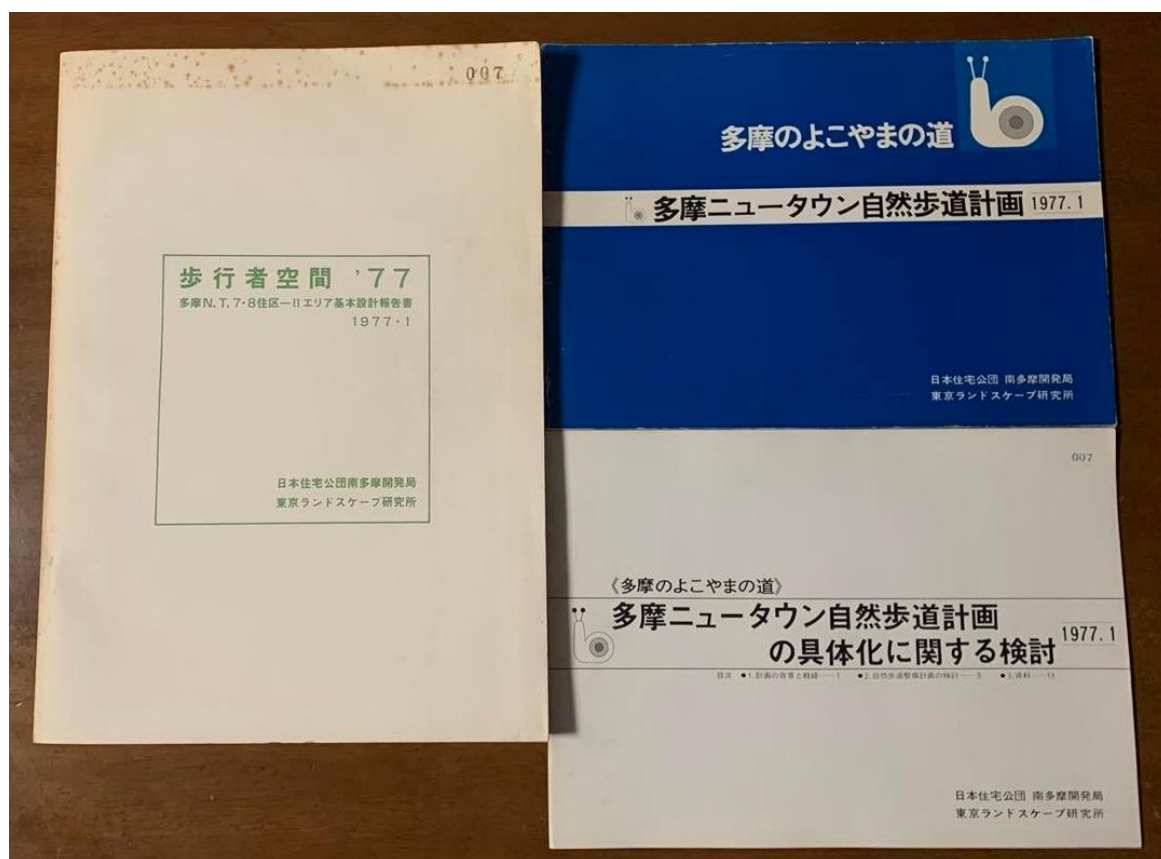
ワンゲルの 12 月の多摩よこやまの道ウォーキングと繋がったのは全くの偶然でしょうが、1 月 3 日発行の雑誌「東京人」が多摩ニュータウンの特集を組んでおり、その中で多摩よこやまの道の紹介もしています。私は 1970 年から 1983 年まで長らく日本住宅公団南多摩開発局に在席したことから、今でも多摩ニュータウン関連でのお付き合いが続いている方が多く、何人かの方から「東京人」1 月号発刊の連絡をいただきました。

特集「進化し続ける多摩ニュータウン」の中の「丘陵の尾根を越える古街道と多摩よこやまの道」と題した章を書かれた古街道研究家の宮田太郎さんは、「人が歩くことを優先したい」展望遊歩道の誕生物語と題して「多摩よこやまの道」は人のみが歩くための遊歩道（歩車分離）であるが、いわば多摩ニュータウン建設最後の仕事ともいうべき後半戦の事業計画によるものであった。行政界に遊歩道計画が構想されたのは意外に早く「多摩ニュータウン自然歩道計画」で初めて「多摩のよこやまの道」の名称が公団側の研究所員から発案されている。と書いています。

「東京人」の特集には、多摩ニュータウンの仕事に携わってきた多くの人達の名が実名で挙がっているのに、ここだけ公団側の研究所員となっているのはなぜ…？ 当時の光景が思い浮かんできました。

2. 歩行者空間 77 と多摩ニュータウン自然歩道計画

家の本棚に2冊のレポートが並んでいます。1冊は大型版で目立つ「歩行者空間 77」、もう1冊が多摩のよこやまの道という肩書が付いた「多摩ニュータウン自然歩道計画」というパンフレットのようなレポートで、どちらも1977.1の日付がついています。



「歩行者空間 77」は、図面と報告書を合体しようとした大型版レポートでサブタイトルが「多摩ニュータウン 7・8 住区 - II エリア基本設計報告書」となっています。

I 歩行者専用道路 II 公園（近隣公園・児童公園）III 傾斜地住宅の 3 章立てで、当時北部に現況のままの地形も残っていた 7・8 住区 - II エリアで傾斜地住宅の提案もしようとしたレポートで、文字より図やパース・写真が圧倒的に多いレポートです。

もう 1 冊のレポート「多摩ニュータウン自然歩道計画」は、さらに徹底してパンフレットのようなスタイルでというのが共通認識でした。

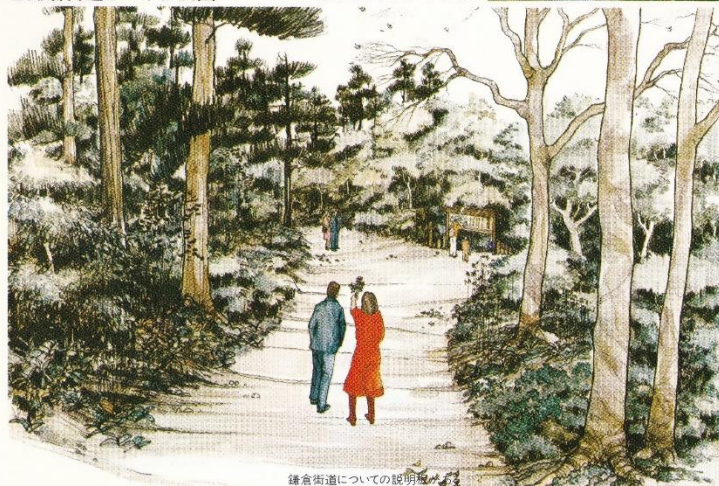
●歴史散策の道

- 鎌倉街道は歴史的環境にふさわしい保存修景を施すとともに、一本杉公園と一体となったデザインを考える。また、小野路町についてはルートからはずれるが同じ歴史的環境を保存した町並として、一体的に考えることが望ましい。



■鎌倉街道と一本杉公園

鎌倉街道の壮麗なスギ木立ち

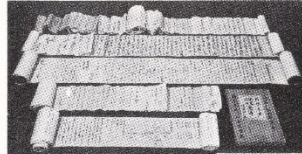


鎌倉街道についての説明図

●「小野路町」の歴史と町並



▲天保の改革により、小野路村は小野(領)外三十四ヶ村の郷村となった。小野路村には名主が二人おり鎌倉家と小島家が家督を継いだ。明治維新後、明治が小島家の領地を没収した。この領地図は明治十年頃のものであるが、幕末当時の屋敷の敷地をよく伝えている。



新保組長書簡



近藤勇肖像 (明治初期油絵)



土方歳三

小島為政

左は近藤勇、右は為政陣羽織

●小島為政と近藤勇とは義兄弟の縁を結ぶほど親交があった。彼はまた新しい時代に対応するための学問(小野路学)を聞いて、自由民権を唱える志士を生んだ。(小島資料館の資料より)



●家傳のおまけを残す小野路の町並
写真右側は小島村で近藤勇などの資料を展示している。

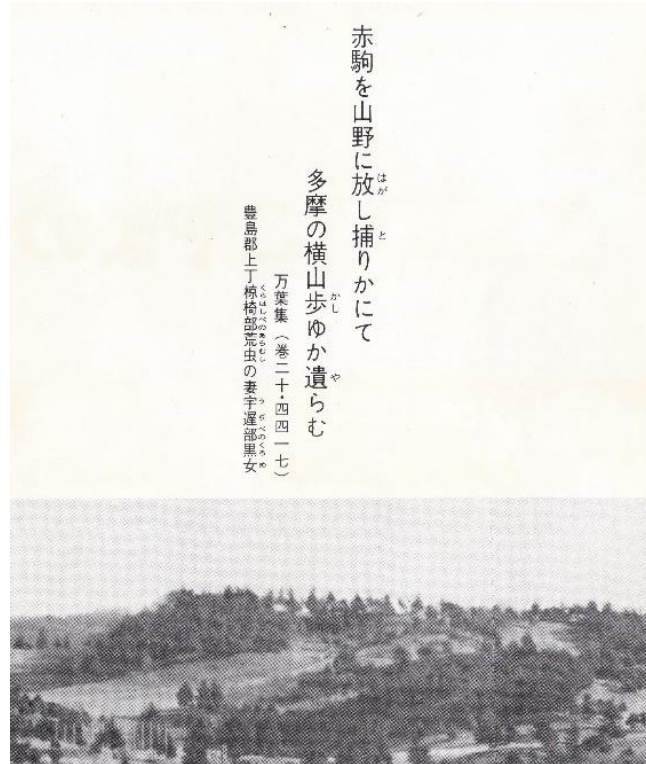
多摩ニュータウン自然歩道計画「多摩のよこやまの道」より

どちらのレポートにも発注者の日本住宅公団南多摩開発局と受注者の東京ランドスケープ研究所の名が載っています。調査のメインスタッフは「東京人」で宮田太郎さんが公団側の研究所員と書いていた東京ランドスケープ研究所の当時の代表の小林治人さんとこの調査担当者の椎名和美さんです。

椎名さんは私より少し若いほぼ同年配の方、「赤駒を山野に放し捕りかにて多摩の横山歩しゆか遣らむ」という万葉集の歌を最初に見つけてきた方です。私とは頻繁に打合せをし「多摩ニュータウン自然歩道計画」の表紙の裏に載せることにしましたが、この

ことが思わぬ議論を巻き起こすことになりました。

異論が飛び交いました。「鎌倉街道のように南北繋ぐ道ならまだ理解できるが、多摩ニュータウンの南側境界を東西に歩く自然歩道を多摩の横山とは云えんだろう！」というのが正論で多数論。たまに「ニュータウン境界を横に歩くんだからよこやまの道でいいんじゃないの」という議論を避けた助け舟。最後はやや強引に「多摩よこやまの道」をかたつむりのイラストと一緒に表紙に載せましたが議論が続く日々でした。



3. 「東京人」1月号が届けてくれた新春プレゼント！

「東京人」の中の「丘陵の尾根を越える古街道と多摩よこやまの道」の中で、宮田さんは「防人が見た風景、感じた気持ちを再現したい」と書き、「防人見返りの峠」は、多摩ニュータウン永山団地の南はずれの高台にある。「多摩よこやまの道」の中でも最も優れた眺望ポイントであり、人気も高いスポットだ。その理由は、目の前には雄大な丹沢連峰や秩父連邦が連なり、富士山までもが眺望できること、そして多摩ニュータウン地域全体までもが見渡せるからだ。展望台の脇には「防人見返りの峠」の標柱も建てられている。」と書いてその写真を載せています。



「歩行者空間 77」と「多摩ニュータウン自然歩道計画」を出した 1977 年というのはどんな時代だったのでしょうか？ 今から 45 年前、三全総（第三次全国総合開発計画）の定住圏構想の時代、ロッキード事件の翌年、成田空港開港の前年、世の中かなり右肩上がりの時代で、大都市でも地方都市でも何となく活気が感じられ、夜の街角からは中島みゆきの「そんな時代もあったねと…」という曲が流れる時代でした！

1977 年のワングル同好会は設立 4 年目の最盛期で月 1 回は登山かスキー、1974 年 8 月には最初の海外遠征モンゴル、1977 年 11 月には知床のナショナルトラスト運動にも登録しています。やがて高齢化するなどとは誰も考えていませんでした！

「東京人」1 月号の 60 ページ 丘陵の尾根を越える古街道と「多摩よこやまの道」に宮田太郎さん自らが作図して載せた「多摩ニュータウン地域と周辺の古街道地図」が 1977 年の日本住宅公団南多摩開発局での激しい議論を、今は楽しい思い出に変えて届けてくれました。感謝！！

